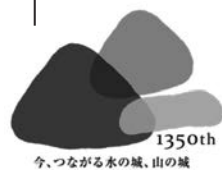


基肄城築造1350年

基肄城を知る②

基肄城築造の記録 — 基肄城築造1350年の証 —



基肄城跡は、来年の2015年（平成27年）をもって、築造1350年を迎えます。その根拠となる資料が、実は日本の古代に編さんされた歴史書に記されています。通称六国史と呼ばれる、『日本書紀』『続日本紀』など6つの歴史書から構成されることから、そう呼ばれています。その中の一つ、『日本書紀』に基肄城築造の経緯が記されています。

基肄城築造の経緯は、今から1383年前の西暦631年まで遡ります。時代は飛鳥時代、当時の東アジア世界では、強大な国力を有する唐帝国や韓半島にある高句麗、百濟、新羅の三国による領土争いが繰り広げられていました。『日本書紀』には、後に白村江の戦いに日本を導くことになる二人の人物の記事があります。

一つは、舒明三（631）年三月「百濟王義慈入王子豊璋為質。」百濟王義慈の王子として日本に人質的扱いでやって来た余豊璋、白村江の戦いで百

済復興軍最後の王となる人物です。そしてもう一人、後に統一新羅の基礎を築く新羅王武烈となる人物金春秋が大化三（647）年七月にやって来ます。この二人によって、天智二（663）年八月の白村江の戦いへの道を歩み始めることになりました。

大化三年にやって来た金春秋は、対話能力に長けた人物として『日本書紀』は伝えます。新羅の内乱を治め、すぐさま日本にやって来た金春秋の目的は何だったのでしょうか。それを知る手掛かりは、韓半島における新羅の勢力図が物語っています。

世たのです。『三国史記 新羅本紀』は伝えます。真徳王二十（648）年、唐の皇帝太宗に謁見した金春秋は、新羅の国情を訴え、唐との連合の約束を取り付けます。前年に倭国にいた金春秋は、翌年には唐の皇帝に謁見するという当時の旅程では考えられない素早さで事を進めていきます。倭の国情と百濟王子余豊璋を介した倭と百濟の結びつきを知った上で、唐太宗への謁見を謀ったのです。

こうして、新羅と唐、倭と百濟の連合軍が形づくられ、天智二（663）年八月、運命の時をむかえることになりました。

韓半島中央部西海岸の白江が、白村江の戦いの地であったと考えられています。時は旧暦の三月（現在の四月）、前將軍上毛氏、中將軍巨勢氏、後將軍阿倍氏ら総勢27,000人の倭軍が百濟復興のため韓半島へ向かったのです。戦いは八月二十八日、その様子を、『唐書 劉仁軌伝』は、「煙炎漲天、海水皆赤（焼ける船の煙が天空を覆い、海水は兵士の血と炎で真っ赤に染まった。）」と記しています。

敗走した倭は、唐と新羅の連



東アジア世界の勢力図【飛鳥時代】

合軍が、すぐさま攻め込んでくるといふ恐怖に悩まされることになります。倭は、天智三（664）年、「討馬嶋、走岐嶋、筑紫国等、置防與烽、又筑紫築大堤貯水。名曰水城。」（対馬、壹岐、筑紫の国に防人と烽を置き、また筑紫に大堤を築きて水を貯える。名付けて水城という。）」さらに、翌年の天智四（665）年に「遣達率憶禮福留、達率四比福夫於筑紫国、築大野及椽二城。」（達率憶禮福留、達率四比福夫を筑紫国へ遣わし、大野および椽の二城を築かせる。）」と『日本書紀』は伝えています。ここに記されている「椽」こそ、我が基山町にある「椽城」、そして『続日本紀』文武二（698）年五月条に記される「令大宰府修治大野、基肄、鞠智三城（大宰府、大野・基肄・鞠智三城を修治す）」とある基肄城なのです。

今、基山山頂にある特別史跡の碑に「基肄（椽）城跡」と記されている理由はここにありま

※問合せ先
教育学習課

ふるさと歴史・文化係
電話92-2200